

「DVD 上映会」を開催しました！

第2学期中間試験の最終日であった10月17日(金)。その日の午後に、DVD「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」の上映会を実施しました。計5名の生徒・教職員が参加しました。

上映会后、生徒の皆さんから前向きな感想をいただきました。「何度観ても感動できる作品で、人の想いの強さを改めて感じました」、「次の上映会にも参加したいです」、など。少ない人数の上映会でしたが、皆さんがそれぞれ、充実した時間を過ごせたようです。参加者の皆さん、ありがとうございました。



次の「DVD 上映会」は、期末試験最終日の11月28日(金)の午後を予定しています。上映作品を決めた後、皆さんにお知らせします。ぜひご参加ください。



さて、今号の「図書館通信」で紹介する本は、私が以前から気になっていた人物の一人の著作です。**東畑開人『なんでも見つかる夜に、こころだけが見つからない』(新潮文庫、2025年)**です。個人の自由が声高に主張される一方、問題がひとたび起きると、「自己責任」の名の下、本人のせいにされてしまう現代社会。本書は、カウンセリングルームを主宰する臨床心理士の著者が、日々の経験をもとに、「ひどく孤独になりやすい社会」をどう生きるかについて論じたエッセイです。困難なこと、辛いことなどに直面した際、人の心はどのように働き、それをどうしたら落ちつかせることができるのか。著者は心の働きを整理する6つの思考法を具体的に紹介していますが、私は特に「第3章 人生は複数である 働くことと愛すること」、「第7章 幸福は複数である ポジティブとネガティブ、そして純粹と不純」がおもしろいと思いました。中でも後者では、「幸福とは何か」が論じられていますが、著者の結論は次の通りです。「複雑な現実をできるだけ複雑に生きることである」。これのどこが「幸福」なのか分らないと思うので、本書をぜひ通読してください！

著者は本書のあとがきにて、日々のカウンセリングの中で、「もっとも感動するのは勇気に出会ったとき」であるとして、次の文章を記しています。「結局のところ、人間にとって最も恐ろしいのは人間なのだろう。人を傷つけるのは人だからだ。だから、私たちはみんな臆病だ。どうにかこうにか心を守ろうとして生きている。しかし、人を癒やすのは人であり、人間がもっとも信じたいのは人間だ。だから、ときに勇気が湧き、人は今まで立ち入れなかった他者との関係に踏み込み始める。臨床をしていると、ときどきそういう小舟(＝各個人のこと)の勇気を目撃することになる。それが小舟の生活を小さく変え、その積み重なりが人生を大きく変えていく」。これは、何もカウンセリングの現場に限った話ではないと思います。私たちが生活する学校という場にも当てはまることではないでしょうか。「人を癒やすのは人」、「人間がもっとも信じたいのは人間」。私たちの大切な学校生活を支える教えのように思います。

著者の『居るのはつらいよ：ケアとセラピーについての覚書』(医学書院、2019年)、『野の医者笑う 心の治療とはなにか?』(文春文庫、2023年)も傑作です。ぜひ読んでみてください！

戦後80年
企画

特別講演会

—「より良い将来に向けて努力する」ために—

2025年11月4日(火) 16:00~17:00

場所: 図書館2階・多目的コーナー



演題

フランスの第二次世界大戦と
戦後80年

講師

南 祐三 准教授

(南山大学国際教養学部)

一般的に、フランスは第二次世界大戦の戦勝国として認識されています。しかし実際には、1939年9月1日の戦争開始から45年5月のドイツ無条件降伏までの5年以上の歳月の大半を敗戦国あるいは中立国として過ごしていました。40年6月の時点でドイツに降伏し、以後約4年間はドイツ軍の占領下に置かれていたからです。じつはフランスは第二次世界大戦において、交戦国、敗戦国、中立国、戦勝国と様々な立場を経験しています。この経験はフランスの戦後政治・社会でどのように受け止められ、歴史認識にどのような影響を与えたのでしょうか。この講演では、単なる戦勝国ではなく、また日本のような敗戦国とも異なる経験と記憶をもつフランスにとっての第二次世界大戦と戦後80年について考えてみたいと思います。

講師略歴：1979年生まれ。2012年、早稲田大学大学院文学研究科単位取得退学。
富山大学人文学部准教授を経て、2023年より現職。博士（文学）。

<問い合わせ先>

○花田先生(中学部)

○齋藤先生(図書館司書)